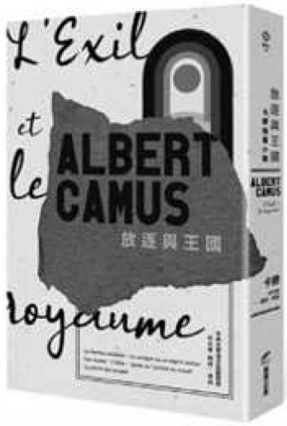
〈セッションⅢ　自然の中で、または自然を前にして　生とその有限性〉　司会：髙塚　浩由樹（日本大学国際関係学部准教授）

自然と人間のあいだで　――カミュの視点

徐　佳華（シュー・ジアホワ）

【要旨】

カミュの作品において自然は、人間がどこに位置しているかによって異なる意味を持つ。人が自然の前に立っているのか、それとも自然の懐に抱かれているのか、遠くにいるのか近くにいるのかによって、よそよそしい存在にも相棒にもなり、あるときは証人、裁判官、そして人間の存在を正当化するものともなる。自然は外部にありながら人の内奥にもある現実で、真実の同義語をなし、生と死を縁取っている。現代人が自然を支配しようとして自然から遠ざかるのに対して、「ぼくの一切の努力は触れ合いを取り戻すことにある」とカミュは書いた。自然をいかに見るかを問うことは、自然と人間の関係を考えることに繋がっていよう。



【プロフィール】徐佳華（シュー・ジアホワ）
台湾国立中央大学人文学部フランス語学科副教授。博士論文「アルベール・カミュの創作作品における追放」によりソルボンヌ・ヌーヴェル大学（パリ第三大学）で博士号取得。その後もカミュに関する研究を続け、２０２１年に『追放と王国』の繁体字中国語訳を上梓した。カミュと同時代に生きたマグレブ（北アフリカ）のフランス語作家たちについても研究している。